

〈研究ノート〉

Schwartz の「価値観研究」の方法論的な検討*

真 鍋 一 史**

I. はじめに

Shalom H. Schwartz の価値観研究は、現在、心理学・社会心理学・社会学を中心に、広く「比較文化論」「パーソナリティ研究」「発達心理学」などの諸領域において、世界の多くの研究者の関心を集めている。では、その内容がどのようなものかという点、それは、Schwartz が人びとの価値観を「環状連続体 (a circular continuum という用語の筆者による日本語訳)」という形状モデルで描き出したという点を中心となっている。このような「環状連続体」にあって、それぞれ隣接している領域（扇形の部分）に位置する価値観は、相互交換的な関係にあり、両者は類似の意味を持っている。そして、その反対側の領域に位置する価値観は、それとは対立する意味を持っている。こ

れが Schwartz の基本的な「価値観の構造モデル」である（図1）。

ここで、「基本的な」という表現を用いたが、それは、Schwartz の「価値観モデル」のアイデアが発表されて以来、いまだそのアイデアにはいわば到達点というべきものが示されているわけではなく、Schwartz 自身によって、また Schwartz とその共同研究者によって、さまざまなそのアイデアの「進化」の試みが続けられてきているからである。

ところが、世界の研究者の多くが、Schwartz が「環状連続体」という形状（configuration）で描き出した「価値観モデル」には大きな関心を示すものの、このような形状モデルが構成されることになった Schwartz の知的営為のプロセスそのものに関心を示す研究者は必ずしも多くはない。

しかし、「科学」と呼ばれる人間の知的営為は、まさにここから出発しなければならないのではなかろうか。具体的にいうならば、それは、Schwartz の構成した「環状連続体」という形での「価値観モデル」が、Schwartz の設定した「枠組み」「条件」「ルール」にもとづいて収集されたデータを用いて、実証的に「再現 (reproduce)」されるというところから出発しなければならないのではなかろうか。

さらに、この「再現」ということに関しては、ここで取り組むべき重要な課題がある。それは、「文化比較 (cross-cultural comparison)」あるいは「国際比較 (cross-national comparison)」という視座である。Schwartz 自身、そしてその共同研究者は、「価値観モデル」の構築のために、そのアイデアの発表の当初から、このような「比較の



図1 Schwartz (1992) の「価値観の環状連続体モデル」

*キーワード：価値観モデル、再現、PVQ-RR、SLQ/TLQ、翻訳—逆翻訳、脱中心化

**関西学院大学名誉教授、青山学院大学地球社会共生学部教授

視座」に立っていた。いうまでもなく、それは、Schwartz の価値観研究の目標が Basic Human Values の探究というところに置かれていたからにはほかならない。人びとの価値観の「諸相」とその「構造」についての一般化をめざそうとするならば、そのような探究はある特定の文化／国における調査研究のみでよしとすることはできない。さまざまな文化／国における調査研究の実践を踏まえて、初めてそのような一般化が可能となってくる。

そして、文化比較調査／国際比較調査というのは、同じ調査を、同じ方法を用いて、同じ条件のもとに、多くの文化／国において、同時に行うことによって、それらの文化／国における人びとの回答結果を記述・分析・解釈しようとする試みである。ここで、重要なポイントは、「同じ調査」「同じ方法」「同じ条件」ということで、具体的にいうならば「調査対象者の選定の方法」「実査の方法」「質問と回答の内容・形式・ワーディング」などをすべてまったく「同一」にするということにある。

こうして、Schwartz の「価値観モデル」の「再現」の試みにとっては、以上のような Schwartz の設定した「枠組み」「条件」「ルール」の再検討ということがきわめて重要な課題となってくるのである。

以上のような方法論的な「問題関心」にもとづいて、国際共同研究が開始された。メンバーは、ドイツ・ケルン大学の Wolfgang Jagodzinski 教授、Eldad Davidov 教授、Hermann Dülmer 教授、北海道大学の Carola Hommerich 准教授と筆者の5名であり、イスラエル・ヘブライ大学の

Schwartz 教授とは常に緊密な連絡を取りながら、共同研究を進めてきた。本稿では、そのような共同研究において確認してきた Schwartz の「価値観モデル」の再現化のプロセスと、その方法論的な諸問題をめぐる議論を可能なかぎり詳細に報告したい。

II. Schwartz の「価値観モデル」における「概念化 (conceptualization)」の試み

Schwartz の価値観研究の中心は、人びとの価値観が「環状連続体」と呼ばれる幾何学的な「構造モデル」で描き出されたという点にある。社会科学にあって、価値観という概念は、いうまでもなく「構成概念」であって、したがってその概念を構成する諸要素が問題となる。Schwartz は、それら諸要素はその背後にある「動機づけ (motivation)」によって導かれ、それはさらに人間の「普遍的な必要条件 (universal requirement)」——①生物有機体としての欲求 (needs as biological organism)、②社会的相互作用の欲求 (social interaction needs)、③生存と福利の欲求 (survival and welfare needs) ——から出てくるとした (Schwartz, 1992, Schwartz et al., 2012)。以上のような、価値観の諸要素 (Schwartz の用語でいうならば value types) とその動機づけの具体的な内容について、Sagiv と Schwartz (1995) は、表1のように整理している。

こうして、価値観を構成する諸要素についての「概念化」を踏まえて、Schwartz は、つぎに、それら諸要素の相互間の「関係」についての理論的考

表1 Schwartz (1992) の「価値観の諸要素 (value type) とその動機づけ (motivation) の内容」

Value type	Motivational emphasis
Power	Social status and prestige, control or dominance over people and resources
Achievement	Personal success through demonstrating competence according to social standards
Hedonism	Pleasure and sensuous gratification for oneself
Stimulation	Excitement, novelty and challenge in life
Self-direction	Independent thought and action – choosing, creating and exploring
Universalism	Understanding, appreciation, tolerance and protection for the welfare of all people and for nature
Benevolence	Preservation and enhancement of the welfare of people with whom one is in frequent personal contact
Tradition	Respect, commitment and acceptance of the customs and ideas that traditional culture or religion provide the self
Conformity	Restraint of actions, inclinations, and impulses likely to upset or harm others and violate social expectations or norms
Security	Safety, harmony and stability of society, or relationships, and of self

察へと進んでいった (Schwartz, 1992; Schwartz et al., 2012)。

そこで、筆者の問題関心は、このような Schwartz の理論的考察が、いかにしてその形を整えるに到ったかという点にある。思うに、それは、Schwartz による関連文献の渉獵と精査、そして何よりも価値観をめぐる Schwartz 自身による経験世界の幅広い観察、さらに観察された事象についての豊かなイマジネーションと深い洞察、をとおして結晶化されてきたものに違いない。しかし、そのような結晶化のプロセスは、いかにして追体験が可能となるのであろうか。このような関心の線上で、筆者は、Schwartz の文献の再検討の試みを計画している。その計画においては、「比較」という視座が有効となるであろう。そのような「比較」の試みに利用する文献としては、手始めに、いわば「日本的エートス (Ethos)」ともいべきものを描き出した以下の文献などを考えている。

新渡戸稲造『武士道』岩波文庫、1938 年
鈴木大拙『日本の靈性』岩波文庫、1972 年
九鬼周造『「いき」の構造 他二篇』岩波文庫、1979 年

Ⅲ. Schwartz の「価値観モデル」の再現化のプロセス ——TLQ の作成まで——

1. Schwartz の「価値観を捉える質問諸項目」には、複数のバージョンがある。そこで、今回の国際共同研究において、どのバージョンを用いるかを決めなければならない。われわれは、PVQ (Portrait Values Questionnaire)-RR57 items (31/10/2013) を用いる。それは、以下のような理由からである。

すでに述べたように、Schwartz の「価値観モデル」は進化を続けている。その方向は、価値観の「次元の細分化の方向」と「測定の便宜化の方向」ともいべきものといえよう。

まず、前者の側面については、Schwartz (1992) と Schwartz et al. (2012) を比較することで明らかとなる。Schwartz (1992) では、環状連

続体を circular order の形で構成する価値観が、「Security」「Tradition」「Conformity」「Universalism」「Benevolence」「Self-Direction」「Stimulation」「Hedonism」「Achievement」「Power」の 10 に分けられたが、Schwartz et al. (2012) では、それら価値観のいくつかがさらに細分化——例えば「Security」が「Personal Security」と「Societal Security」に細分化——され、19 に分けられることになった。そして、この場合、19 の価値観の諸要素ごとに 3 つずつの質問項目が作成されたので、質問紙は、 $19 \times 3 = 57$ の質問諸項目で構成されることになった。

では、なぜ、このような「細分化」がなされることになったかという、いうまでもなく、それは、それら質問諸項目の「信頼性 (reliability)」と「妥当性 (validity)」の検討にもとづいて、測定の精緻化が追究されてきたからにほかならない。

つぎに、後者の側面については、じつは、このような「次元の細分化」の試みと同時に、他方では「測定の便宜化」の試みも始まっていたのである。その一つの事例が、つぎの文献である。

Carson J. Sandy, Samuel D. Gosling, Shalom H. Schwartz & Tim Koelkebeck (2016), The Development and Validation of Brief and Ultra-brief Measures of Values, *Journal of Personality Assessment*, Routledge.

この文献における共同研究では、Schwartz (1992) の 10 の価値観の諸要素にもとづいて、20 あるいは 10 の質問項目という、そのメンバーの用語でいうならば brief and ultra-brief measures of values の開発が試みられた。

では、なぜ、このような試みがなされたのかというと、それは、例えば、「パーソナリティ研究」においても、「縦断的調査」においても、「多くの国ぐにを対象とする大規模な国際比較調査」においても、PVQ-RR57 items をすべて取り入れることは調査票のスペースの関係で困難であり、やはり実査の観点からするならば、便宜的に short measures/scales が求められることになるからである。ここで、brief and ultra-brief measures of val-

ues の開発を、「測定の便宜化」と表現した所以である。

さて、以上のような Schwartz の「価値観モデル」の研究の現状のなかにあって、われわれの判断は、「便宜性」よりも「精緻性」を選ぶというものであった。そして、さらに、PVQ-RR57 items に関しては、Berger と Luckman (1966 = 1977) のいうところの Recipe Knowledge (処方的情報) ともいふべきものが最も豊富に利用できるという点も重要であった。その一つが、以下で取りあげる「各国の言語への翻訳のための Schwartz 自身によって準備された注釈」の存在である。

以上のような理由から、われわれは国際共同研究において、PVQ-RR57 items (31/10/2013) を用いることにした。この質問紙には、「男性用」と「女性用」の二つのバージョンがあるが、本稿の末尾の〈資料 1〉に示したのは、前者のバージョンである。

2. Schwartz の「価値観モデル」の再現化を、「文化比較／国際比較」の視座から試みようとするならば、上述の Schwartz の「質問諸項目」の翻訳が、つぎの重要な課題となる。じつは、Schwartz は、当初から、そのような試みに備えて、「翻訳のための注釈」を作成していた。日本においても、Schwartz の「質問諸項目」を使った追試の調査は、筆者の知るかぎりにおいても、複数のものがある。ところが、これらの試みにおいては、不思議なことに、Schwartz の準備した「翻訳のための注釈」が活用された形跡は見られない。このような点からするならば、われわれの国際共同研究のアドバンテージの一つは、常に Schwartz と直接に連絡を取りながら、研究を進めることができたという点にあるといえる。そもそも、今回の国際共同研究のメンバーの一人である E. Davidov は、かつてヘブライ大学で Schwartz の指導を受けた学生であり、長じてその共同研究者となり、Schwartz et al. (2012) の共著者の一人となった研究者である。そして、W. Jagodzinski, E. Davidov, H. Dülmer、筆者はいずれも「ヨーロッパ社会調査学会 (European Survey Research Association: ESRA)」のメンバー——E. Davidov は現在その会長を務めている——であ

り、Schwartz とは同じ学会のメンバーとして親交がある。この点は、国際共同研究という形での「研究活動」の方略という点からしても、やはり特筆しておくべきことといえるかもしれない。

さて、Schwartz の「価値観モデル」の再現化において、ここでの「翻訳のための注釈」は、きわめて重要な意味を持つものといわなければならない。それをとおして、われわれは Schwartz の「概念化」と「操作化」のプロセスを確実に追体験することが可能となるからである。

以上のような点からして、Schwartz の「諸項目」を取り入れた「世界価値観調査 (World Values Survey: WVS)」の「Benevolence」に対応する「質問項目」のワーディングには重要な問題が指摘できる。それは、つぎのような問題である。

「世界価値観調査」の「第 5 回調査」において「Benevolence」に対する質問項目として用いられたのが、「E 周囲の人を助けて、幸せにすることが大切な人」であった。ところが、「第 6 回調査」では、それに替って、あるいは、それと同時に、「F 社会の利益のために何かするということが大切な人」が使われることになった。

このような質問項目の「入れ替え」をめぐつて、「世界価値観調査」の実行委員会において、どのような議論があったかについては、筆者は寡聞にして知らない。しかし、「質問紙調査」における個々の質問項目というものは、「理論変数」に対する「経験変数」という位置づけがなされるものである。Schwartz の、ここでの E 項目、F 項目に対応する「理論変数」、つまり「Benevolence」という用語の理論的な意味内容はどのようなものであったかということ、それは、Schwartz 自身の説明によるならば、

- ・ concern for the welfare of close others in everyday interaction
- ・ preservation and enhancement of the welfare of people with whom one is in frequent personal contact
- ・ caring for in-group members

ということであり、そこで welfare あるいは caring の対象に置かれているのは、いわゆる「ゲゼ

ルシャフトの対象」ではなく、「ゲマインシャフトの対象」である。そして、そうであるならば、F 項目の「社会の利益のために何かすることが大切な人」というのは、「経験変数」としては適切とはいえないのではなかろうかというのが、ここでの問題提起である。

以上の問題提起から、Schwartz の「価値観モデル」の再現化の試みにおいては、関連文献に記された「理論的考察」とともに、「質問諸項目の翻訳のための注釈」がきわめて重要な手がかりとなることが理解されるのである。本稿の末尾に、〈資料2〉として、Schwartz 自身によって準備された“Annotated list of 57 PVO-RRitems 31/10/2013”を掲載する。

3. Schwartz の「質問諸項目」の各言語への翻訳の「ルール」は、このような「注釈」だけにとどまらない。Schwartz は、「質問諸項目」の翻訳と逆翻訳についての独自のルールを提案している。それは、以下のようなものである。

1. Translate the survey to xx including the instructions and scale labels.
2. Obtain a back-translation into English by a person who has not seen the original English. Send both the xx and back-translation to me.
3. I send you my comments on the translation, usually on about 50% of the items.
4. Make changes in the items commented.
5. Give the new full translation (including all items, instructions, and scale labels) to a different bilingual to translate back into English.
6. Send me the revised translation and back-translation.
7. I send you my comments on the translation.
8. Repeat 4-7 until we reach an agreed translation.

そして、さらに、逆翻訳を担当する者については、つぎのように指示されている。

- a) must not know the English questionnaire (most essential condition),
- b) has to be bilingual,

- c) should preferably be a typical despondent rather than a social scientist.

確かに、このように、Schwartz のルールは、きわめて詳細で、厳密なものといわなければならない。では、そこに問題はないのかというと、必ずしもそうとはいえないところがある。それは以下のような点である。

(1) このルールは、実際の調査事例において、どの程度までそのとおり実行されているのであろうか。このような疑問を持つのは、Schwartz の「価値観の質問諸項目」が導入された調査事例として、すでに取りあげた「世界価値観調査」があるが、しかし、その日本語のワーディングを見るかぎり、上述のようなルールが採用されたようには全く思えないからである。

(2) Schwartz のルールにもとづいて翻訳が完成されたとして、それが最良のものであるといえる保証はない。質問紙の翻訳については、すでに1970年代から多くの研究の蓄積がなされてきており、「翻訳－逆翻訳の技法」についてもさまざまな批判がなされてきている。

例えば、Brislin, Lonner と Thorndike (1973) は、翻訳者が「翻訳についての方法的な問題関心を持っていない」「翻訳に取りあげている問題についての社会的な経験を持っていない」という問題を指摘している。逆に、Sperber, DeVellis と Boehlecke (1994) は、「すぐれた翻訳者であれば、ワーディングにやや問題のある Source/Master Language Questionnaire: SLQ でさえ、立派な Translated/Target Language Questionnaire: TLQ に仕上げることができる」という可能性を示唆している。(ここでの議論については、真鍋一史「通文化比較調査および国際比較調査の方法論的課題——調査の等価性の問題を中心に——」『法学研究(慶應義塾大学法学会)』第77巻第1号、2004年を参照されたい。)

以上のような質問紙の「翻訳－逆翻訳の技法」をめぐる先行研究の蓄積に照らして、Schwartz のルールは、はたして万全なものといえるのであろうかという疑問が出てくるのである。

4. 以上のような Schwartz の「翻訳－逆翻訳の

ルール」の検討は、じつは、われわれの独自の「翻訳-逆翻訳の作業」と並行してなされた。つまり、われわれの国際共同研究においては、Schwartz のルールについて詳細に検討した上で、われわれの「翻訳-逆翻訳の作業」に取りかかったというのではなく、これら二つの作業を同時並行の形で行なったのである。いまにして思えば、このような取り組み方は、いわば「知的生産の技術」——この表現は、梅棹忠夫『知的生産の技術』岩波新書、1969 年を借用している——ともいべきものの提案につながるものであった。この点については後述するとして、まず、われわれの「翻訳-逆翻訳の知的作業」の実際について報告しておきたい。

われわれの共同研究は 2014 年 1 月にスタートした。しかし、このような国際プロジェクトがいきなりスタートするということはいえない。このようなスタートのためには、やはりその前史ともいべき出来事があった。それは、プロジェクトの開始時点をさかのぼること 14 年も前、正確に言えば 2001 年 4 月 27 日、オランダ・ティルブルグ大学において、Geert Hofstede の *Culture's Consequences: Comparing Values, Behaviors, Institutions, and Organizations Across Nations*, Sage Publications, Second Edition, 2001 の出版を記念して、国際会議が開催されたという出来事である。この国際会議における共通テーマともいべきものが「文化と価値観 (values)」であり、現代におけるこの研究領域の巨匠ともいべき研究者たち——G. Hofstede, R. Inglehart, S. Schwartz, H. C. Triandis, W. Jagodzinski——が一堂に会する機会であった。筆者も招かれて参加することになったが、それは筆者にとってはまさに僥倖ともいべき出来事であった。これが Schwartz との初めての出会いであった。そして、今回の国際共同研究のグループの中心的なメンバーである Jagodzinski とは、すでに 1997 年以来、「国際社会調査プログラム (International Social Survey Programme: ISSP)」をとおして親しい交わりが続けられていたので、このティルブルグ大学での再会は、まさにその交わりを確認する機会となった。そして、このような Jagodzinski との交わりの延

長線上で、Dülmer, Hommerich との出会いがもたらされることになる。この二人がドイツ・ケルン大学において Jagodzinski の指導を受け、国際的な研究者に育ってきたからにはほかならない。

さて、ヨーロッパにおいては、とくに 1980 年代以降、大規模な社会調査のプロジェクトが継続的に企画・実施・運営されることになり、そのような社会科学の領域における創造的な知的営為の促進・交流・統合をめざして、2005 年、「ヨーロッパ社会調査学会 (European Survey Research Association: ESRA)」が設立された。筆者は、その設立当初からのメンバーであるが、この学会における中心的な研究テーマの一つが「価値観」であり、このテーマを掲げたセッションを継続的にオーガナイズしてきたのが、ほかならぬ Davidov であった。これが筆者の Davidov との出会いの契機であった。

以上のような経緯で研究グループが組織され、共同研究がスタートした。共同研究における問題関心は、「人びとの価値観の日独比較」であり、そのような国際比較のための「枠組み」として Schwartz の「価値観モデル」が有効であるという判断がなされたのである。そこで、共同研究の具体的な目標は、つぎの 2 点に置かれることになった。

- ① Measuring Basic Human Values with the PVQ-RR57 items in Germany and Japan
- ② External Variables and Their Relations to Basic Human Values

そして、まず、①についての研究から着手したが、そのためには Schwartz の「価値観の諸項目」の SLQ (英語) にもとづいて、「日本語版」および「ドイツ語版」の TLQ を作成しなければならない。前者の「日本語版」については、真鍋と Hommerich が、そして後者の「ドイツ語版」については、Dülmer と Jagodzinski がそれぞれ担当することになった。

しかし、このような翻訳作業のためには、Schwartz の「価値観」をめぐる概念化と操作化のアイディアについて正確に理解しておくことが必要となる。こうして、リクエストに応じて、

「文献」「質問紙」「翻訳のための注釈」などの広範な情報が、Schwartz と Davidov から提供されることになった（2014 年 1 月）。

「日本語版」および「ドイツ語版」の TLQ の作成は、それぞれ独立して実施されたので、本稿では「日本語版」の作成のプロセスについて述べていく。まず、このプロセスにおける主要な事柄を時系列的に記しておきたい。

(1) 2014 年 6 月下旬、最初の SLQ の日本語訳が真鍋によってなされた。

(2) 2014 年 7 月初旬、Hommerich（当時はドイツ日本研究所の研究員）が、真鍋による日本語版質問紙の逆翻訳を行なった。

(3) 2014 年 7 月 13 日～19 日、「世界社会学会議」が横浜で開催されることになり、共同研究のメンバー（Jagodzinski、Davidov、Hommerich が参加）を中心に、そこに太郎丸博（京都大学教授）、佐藤嘉倫（東北大学教授）、吉野諒三（統計数理研究所教授）が加わり、真鍋によって「価値観の国際比較」をテーマとするセッションがオーガナイズされ、それと並行する形で太郎丸博教授の主催するセミナー（2014 年 7 月 12 日）「価値観研究のフロンティア」も実施された。この 2 つの会合は、Schwartz の「価値観モデル」の理論的枠組みについて議論するためのきわめて有意義な機会となった。

(4) この機会——Jagodzinski、Davidov、Hommerich、真鍋の 4 人が直接に顔を合わせて議論できる機会——を利用して、2014 年 7 月 15 日、「真鍋の翻訳」と「Hommerich の逆翻訳」を突き合わせて議論するためのミーティングが行なわれた。

(5) ここでの議論を踏まえて、真鍋と Hommerich は、その後、それぞれの翻訳および逆翻訳に加筆・修正を行なうとともに、それまでの議論の結果を Hommerich がメモに取りまとめた。

(6) 2014 年 9 月 16 日 Jagodzinski の再度の来日の機会を利用して、Jagodzinski、Hommerich、真鍋の 3 人が集まり、加筆・修正された翻訳・逆翻訳について再検討するとともに、そのプロセスにおいて提起された諸問題について議論した。なお、このような諸問題、つまり Schwartz の PVQ

-RR57 items とその翻訳の方法をめぐる提起された諸問題については、章を改めて説明することにする。

(7) この共同研究において、日本側からの参加者は当初から真鍋一人であった。しかし、上述の「世界社会学会議」の機会に太郎丸博教授が共同研究のテーマに関心を示したことから、まず、太郎丸教授が、そして、さらに吉川徹大阪大学教授も加わり、2014 年 12 月 8 日と 9 日の両日、ドイツ・ケルン日本文化会館において、ケルン大学主宰で「価値観」をテーマとするセミナーが開かれた。

(8) 以上のように、「Schwartz の価値観モデル」についての理論的な検討」「PVQ-RR57 items の日本語版 TLQ の作成」「Schwartz の Basic Human Values との関係性の分析のための External Values の選定」などを、さらに実践的に進めていくためには、どうしてもそのための研究助成が必要となることが意識されるようになった。そこで、2015 年 1 月、「国際共同研究事業 ORA プログラム」に申請書を提出したが、残念ながら採択には到らなかった。

(9) その後、しばらくの間、共同研究は、それ以上の進展を見ないまま置かれることになった。しかし、それは、「共同研究」としての進展がなかったということであって、メンバーはそれぞれの仕方、Schwartz の「価値観モデル」にかかわる独自の研究を続けてきた。

例えば、真鍋な研究成果にかぎっていえば、つぎのものがある。

Kazufumi Manabe 「Use of Facet Theory in Developing Values Theory of Shalom Schwartz」『青山スタンダード論集』（第 11 号：2016 年 1 月）

真鍋一史「ファセット・アプローチと価値観研究」『関西学院大学社会学部紀要』（第 123 号：2016 年 3 月）

真鍋一史「価値観研究のフロンティア —— Circumplex モデルから Radex モデルへ——」『青山地球社会共生論集』（創刊号：2016 年 5 月）

真鍋一史「国際比較の視座からする Schwartz

の『価値観モデル』の実証的な検討 ——『世界価値観調査』のデータ分析——』『青山地球社会共生論集』（第2号：2017年7月）

Kazufumi Manabe 「Empirical Examination of the Schwartz Value Theory from a Cross-National Comparative Perspective : Data Analysis of the World Values Survey」『関西学院大学社会学部紀要』（第127号：2017年10月）

このような各メンバーの独自の研究成果とともに、ここで特筆しておくべきもう一つは、2016年7月31日～8月3日、名古屋で開催された International Association for Cross-Cultural Psychology の第23回会議において、Davidov が “Methodological Challenges and Generalizations of the Human Values Theory across Cultures” と題するシンポジウムをオーガナイズし、Jagodzinski、真鍋、Davidov がそれぞれプレゼンテーションを行ない、Schwartz も議論に参加したという出来事である。このシンポジウムでの Schwartz との顔合わせの機会は、真鍋にとっては、2001年4月27日、オランダのティルブルグ大学での国際会議——このシンポジウムの内容は、その後、つぎのような単行本の形で出版された。H. Vinken, J. Soeters and P. Ester (eds.) *Comparing Cultures : Dimensions of Culture in a Comparative Perspective*, Brill, 2004)——から、じつに15年ぶりのことであった。こうして、われわれ——Jagodzinski、Davidov、真鍋——は、「Schwartz の価値観モデルにもとづく国際共同研究」の重要性を再確認することになった。

(10) 以上のような経緯を経て、2017年5月、われわれは Schwartz から「日本語版 PVQ-RR57 items」についての新しい情報を受け取ることになる。それは、東京大学医学系の安藤俊太郎助教によって日本語版 TLQ が作成されたという情報であった。われわれは直ちに、共同研究を再開し、まず「真鍋／Hommerich 版」と「安藤版」の比較を詳細に行なった——この比較検討には、Hommerich のリサーチ・アシスタントを務めていた清水香基（北海道大学大学院生）も参加した

——。その結果、「安藤版」には、①Schwartz の Annotated list of 57 PVQ-RRitems の指針を踏まえていない、②It is important for him to～を、「ある人は～を大事にしている」と翻訳している、などの重要な問題があることが明らかになった。

(11) その後、真鍋は、青山学院大学地球社会共生学部の同僚（アメリカ合衆国出身の native speaker であるとともに、日本研究者として日本語にも精通している）Gregory Kheznajat 助教の助けを借りて、「真鍋／Hommerich 版」の再検討を行ない、「日本語版 TLQ の最終版」を確定した（資料3）。

以上が、Schwartz の「価値観の質問諸項目」の「日本語版」の作成までのプロセスである。われわれは、この「日本語版」が、現時点における最も適切な TLQ であると確信している。そこで、つぎに、このプロセスで明らかとなってきた「価値観調査」の方法論的な諸問題を、とくに PVQ-RR57 items と呼ばれる「質問諸項目」と、その「翻訳」をめぐる諸問題に焦点を合わせて議論していきたい。

IV. Schwartz の「価値観調査」の方法論的な諸問題

ここでは、PVQ-RR57 items を用いた「質問紙」と、その「翻訳」をめぐる諸問題に焦点を合わせる。「集合調査法」という実査の問題、「大学生」という調査対象の問題などについては、別の機会に取りあげることにする。

(1) Portrait Values Questionnaire と呼ばれる「間接的方法」は、質問紙調査で一般に用いられている「直接的方法」とくらべて、より「信頼性」と「妥当性」の高さを保証するものといえるのであろうか。この「問い」については、さらに、つぎの二つの側面から、具体的に検討を進めていかなければならない。

①このような「間接的方法」をめぐる方法論的な議論の系譜と、その現在の到達点について確認しておく必要がある。

②Schwartz の「価値観調査」については、複数の measurement scale が開発されてきている。

これらのなかで、例えば、「56 or 57 items SVS」のような「直接的方法」と「PVQ-RR57 items」のような「間接的方法」には、それぞれどのような「利点」と「欠点」があるかについて再検討しておく必要がある。

(2) How much is the person like you? という質問の仕方において、「性差」は重要な要件となるのであろうか。ある人の価値観が自分のそれに似ているかどうかを尋ねる質問の仕方においては、それは「男どうし」あるいは「女どうし」の間でしか考えられないものであろうか。

この点については、さらに、つぎのような疑問が出てくることになる。

①社会調査が実施されるさまざまな社会的・文化的なコンテクストを考える場合、「性差」が強く意識されるコンテクストと、そうでないコンテクストということがあるのであろうか。筆者は男性であるが、それでも、例えば、その「ものの見方・考え方・感じ方」という点において、「私はマザーテレサに似ている」とか表現したとしても、そこに全く違和感はない。しかし、この感覚は筆者の「個人的な」感覚にすぎないのであろうか。このような問題関心について、社会調査の先行研究はどのように答えてくれるのであろうか。

②Schwartz は、その「調査票（質問紙）」について、「男性用」と「女性用」を用いるが、この点についての Schwartz 自身の理論的・実証的な根拠（rationale）は、どのようなものなのであろうか。

(3) その「似ているかどうか」の質問において、「あなたはその人に似ていると思うか」という聞き方ではなく、「その人はあなたと似ているか」という聞き方をするのはなぜであろうか。

ここでも、さらに二つの問題が提起される。

①筆者にとっては、「その人はあなたと似ているか」という聞き方よりも、「あなたはその人に似ているか」という聞き方がより自然な感じがする。それは、精神科学の領域における「内観」あるいは「内省」という用語が示しているように、「人は自己観察にもとづいて他者との関係性を理解する」ということが普通のことであるか

らではなかろうか。このような問題関心に対して、社会調査の先行研究はどのように答えてくれるのであろうか。

②Schwartz 自身は、このような問題に対して、どのような理論的・実証的な根拠を示しているのであろうか。

(4) 今回の経験から、翻訳－逆翻訳をとおしてワーディングを検討するという方法を繰り返すならば、日本語への翻訳文が、いわゆる「日本語らしい日本語」であるよりも、むしろ「直訳的なやや不自然な日本語」になっていく。それは、「直訳的なやや不自然な日本語」の方が、逆翻訳において、より SLQ に近いものとなるからにはほかならない。

ここから、さらに、つぎのような問題が提起される。

①これまでの国際比較調査の方法論というものは、「記号体系」としての「言語構造」の近いものどうしの間での「翻訳－逆翻訳」の実践をとおして一般化されてきたものなのではなかろうか。いうまでもなく、ここでの疑問に答えるためには、質問紙の「翻訳－逆翻訳」をめぐる方法論的な再検討が必要となる。繰り返しになるが、それは「翻訳－逆翻訳」の手続きの「適切性」については、特定の言語ごとに詳細な検討がなされているのであろうかという疑問である。

②Schwartz 自身は、このような問題の所在を、どの程度、認知しているのであろうか。

(5) 英語では「能動態」で書かれている文も、日本語では「受動態」で翻訳した方が自然な感じがするという場合がある。

例えば、問9の「It is important to him that no one should ever shame him」は、そのまま能動態の形で訳せば、「誰もが自分に恥ずかしい思いをさせないことが重要である」となる——この表現は、日本語の語感からするならば、何かきわめて不遜なイメージを醸し出すものといわなければならない——が、これは「誰からも恥ずかしい思いをさせられないことが重要である」と受動態の形で訳した方が、より自然な感じがする日本語となる。しかし、そのように訳すならば、その逆翻訳

の結果は、初めの SLQ とは全く異なるものになってしまう。したがって、「逆翻訳」に重点を置くとするならば、「翻訳」は日本語らしい日本語であるよりも、むしろ「直訳的なやや不自然な日本語の方が望ましい」ということになる。

このような問題は、これまで国際比較調査の方法論の領域において、議論されたことがないのであろうか。

(6) 関係代名詞で連結された文を、日本語にそのままの形で翻訳するのはむづかしい。

その具体的な例として、つぎのような質問項目をあげることができる。

“It is important to him to have the power that money can bring.”

筆者のアイディアからするならば、この英文の自然な日本語訳はつぎのようなものである。「この人にとっては、お金によって力を持つことが重要である。」

しかし、いうまでもなく、このような日本語訳は、その逆翻訳においては、問題をもたらしものとなるであろう。こうして、「翻訳－逆翻訳」という技法の持つ問題性が、あらためて提起されることになるのである。

(7) 最後に、「質問諸項目の翻訳と逆翻訳」をめぐる Schwartz のルールについての問題提起をしておきたい。それは、「翻訳－逆翻訳の結果を Schwartz に送付し、それに Schwartz がコメントを加え、そのコメントに沿って結果に修正を加えるというプロセスを繰り返すことで、双方で合意される翻訳が作成される」という考え方である。しかし、上述の英語－日本語の「翻訳－逆翻訳」についての議論からするかぎりにおいては、はたしてこのようなルールは、これまでうまく機能してきたのであろうかということを疑わざるをえない。

ここでの議論は、さらに、「国際比較調査」における「脱中心 (decentering)」の考え方にもとづく調査の質問諸項目の確立という提案につながる。「脱中心」という考え方は、つとに 1970 年代までにさかのぼるものである。そして、その一つに、つぎの文献に示されたアイディアがある。

L. Werner and D. T. Campbell (1970). Translating, Working through Interpreters and the Problem of Decentering. In: R. Naroll and R. Cohen (eds.), *American Handbook of Methods in Cultural Anthropology* (pp.398-420). NY: Natural History Press.

ここで、「脱中心化の翻訳」というアイディアは、これまで SLQ を原型・基準・中心として、その翻訳をいかにして SLQ に近づけるかがポイントとされてきたのに対して、SLQ と TLQ のいずれをも生かしながら、両者の核心的な意味 (kernel meaning) が一致 (concordance) するまで翻訳と逆翻訳の作業を繰り返すことによって、新しい質問諸項目の確立をめざす方法として位置づけられるのである。

思うに、Schwartz の「価値観の諸項目」を、真に通文化的／交差国家的な measurement instrument として確立する方向をめざすのであれば、このような「脱中心化の翻訳」の試みは、まさに不可避のことといわなければならないのではなかろうか。

以上の Schwartz の「価値観の諸項目」の翻訳をめぐる諸問題についての議論を踏まえて、われわれは、PVQ-RR57 items の日本語版 TLQ を、それが完全に Schwartz の「翻訳－逆翻訳」のルールに従ったものでないにもかかわらず、現時点における最も適切なものとして提案したいと考えているのである (いうまでもなく、われわれの TLQ は、このような「脱中心」のアイディアで作成されたものではない。それは、現時点では、「Schwartz 方式」との妥協の産物となっている)。

V. おわりに

本稿では、Schwartz の「価値観モデル」の再現化にもとづく、独自の「価値観の国際比較の試み」をめざす国際共同研究の目的・方法・議論について紹介してきた。

Schwartz の「価値観モデル」の再現化における最大の課題は、その「価値観の諸項目」の日本語版 TLQ の作成である。そこで、本稿では、と

くに Schwartz の「価値観モデル」の再現化のプロセスのこのフェーズ (phase) に焦点を合わせて、共同研究グループの実践のプロセスと、そこで浮びあがってきた諸問題についての方法論的な議論と、それを踏まえたわれわれの方針について、かなり詳細に記してきた。

その方針は、一言でいうならば、日本語版 TLQ の作成にあたっては、必ずしも Schwartz の翻訳-逆翻訳のルールに従うものではないということである。こうして、われわれは、独自の仕方、日本語版 TLQ を完成させた。そして、そのプロセスで、国際比較研究において、英語と日本語という二つの言語の間に翻訳-逆翻訳を繰り返すことによって、TLQ の作成をめざすという場合に出てくる諸問題——とくに、はたして①リジッドな翻訳-逆翻訳という方法、②「社会学者」ではなく、「ごく普通の調査回答者」による翻訳-逆翻訳という方法——それでは、今回のような方法論的な諸問題の提起には到らなかったと考えられる——が万全なものといえるであろうかという問題の発見と、翻訳-逆翻訳のプロセスにおける「方法論的な脱中心化」の提案——今回の共同プロジェクトのいわば副産物ともいうべき「知的生産のアイディア」の提案——、に到ったのである。ここで、筆者があえて、「知的生産のアイディア」という表現を用いたのは、現在、社会科学のさまざまな領域において、国際比較の試みが飛躍的に多くなってきたにもかかわらず、以上のような「問題の提起」と「方法の提案」は、必ずしも創造的になされてきているとはいえない

からである。

このような副産物を生み出しながら、われわれは、ようやく日本語版 TLQ の完成に到ったのである。いうまでもなく、共同研究のつぎの段階は、このような「価値観の諸項目」との関係性の分析を進めるための external variables の選択と、それらを含めて構成される「質問紙」の作成である。われわれの共同研究の進展については、順次、今回と同様の報告を続けていきたいと考えている。

文献：本文中に記載したものを除く

- Berger, Peter L. and Luckmann, Thomas (1966). *Social Construction of Reality*, Anchor Books. (=1977, 山口節郎訳『日常生活の構成』新曜社.)
- Brislin, R. W., Lonner, W. J. and Thorndike, R. M. (1973). *Cross-Cultural Research Methods*. John Wiley & Sons.
- Sagiv, L. and Schwartz, Shalom H. (1995). Value Priorities and Readiness for Out-group Social Contact, *Journal of Personality and Social Psychology*, 69.
- Schwartz, Shalom H. (1992). Universal in the Content and Structure of Values: Theory and Empirical Tests in 20 Countries, in M. Zanna ed., *Advance in Experimental Social Psychology*, 25, Academic Press.
- Schwartz, Shalom H. et al. (2012). Refining the Theory of Basic Individual Values. *Journal of Personality and Social Psychology*, 103(4).
- Sperber, A. D., DeVellis, R. F. and Boehlecke, B. (1994). Cross-Cultural Translation: Methodology and Validation. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 25.

〈資料 1〉 PVQ-RR Male (10/2013)

Here we briefly describe different people. Please read each description and think about how much that person is or is not like you. Put an X in the box to the right that shows how much the person described is like you.

[illegible]

HOW MUCH LIKE YOU IS THIS PERSON?

[illegible]

〈資料 2〉 Annotated list of 57 PVQ-RR items 31/10/2013

Annotated list of 57 PVQ-RR items 31/10/2013

Below are the items for the PVQ-RR. To aid in translation, I have added comments to clarify meanings of some items. The items are numbered according to their location in the survey. Items in bold are changed from the previous version, the PVQ-R. All are phrased in male form. The female version changes all pronouns. There is a short definition of its motivational goal for each of the 19 value facets. The instructions remain the same.

Here we briefly describe different people. Please read each description and think about how much that person is or is not like you. Put an X in the box to the right that shows how much the person described is like you.

Not like	Not like	A little	Moder-	Like	Very	
me at all	me	like me	ately like	me	much like	
			me		me	

Self-Direction: Freedom of thought and action

Autonomy of Thought: Freedom to cultivate one's own ideas

1 It is important to him to form his views independently.

23 It is important to him to develop his own opinions.

39 It is important to him to figure things out himself.

Autonomy of Action: Freedom to determine one's own actions

16 It is important to him to make his own decisions about his life.

30 It is important to him to plan his activities independently.

56 It is important to him to be free to choose by himself what he does.

Stimulation: Excitement, novelty, and change

10 It is important to him always to look for different things to do.

28 It is important to him to take risks that make life exciting.

43 It is important to him to have all sorts of new experiences.

Hedonism: Pleasure or sensuous gratification

3 It is important to him to have a good time.

36 It is important to him to enjoy life's pleasures.

46 It is important to him to take advantage of every opportunity to have fun.

Achievement: Success according to social standards

17 It is important to him to have ambitions in life.

32 It is important to him to be very successful.

48 It is important to him that people recognize what he achieves.

コメント **[SS1]**: Use the verbs in your language that go most naturally with 'views' or 'viewpoints' for this item, and with 'opinions' in SDT23. Different verbs should be used in each of the 3 SDT items.

コメント **[SS2]**: The emphasis is on individual thinking in an autonomous way, not relying on others' views. It does not imply rejecting others, just thinking and reaching conclusions based on one's independent judgment. This also applies to the other 2 SDT items.

コメント **[SS3]**: On one's own. Figuring out means making sense of. It can refer to anything which requires thinking carefully, such as understanding a problem or idea, forming an opinion, creating something new, etc. It does not refer to acting independently but only to thinking independently.

コメント **[SS4]**: Do not use a word with a strong negative connotation.

コメント **[SS5]**: The emphasis in the hedonism items is pleasure, sensual gratification not excitement and arousal. This distinguishes hedonism from stimulation. The words used should suggest such pleasures as eating, sleeping, bathing, massages, dressing up, sunbathing, etc.

コメント **[SS6]**: This term should refer to activity that is pleasurable and fun rather than intellectual or aesthetic or very exciting. It is necessary to avoid 'exciting' in order for this to be hedonism and not stimulation.

コメント **[SS7]**: This means to use, not to ignore or let an opportunity go by.

コメント **[SS8]**: high aspirations for success, being a person who want to achieve things.

コメント **[SS9]**: Notice, see, pay attention to. This captures demonstrating success socially.

コメント **[WU10]**: His achievements, the results of his strivings, not the striving itself.

Power: Control over resources and people*Dominance over people*

- 6 It is important to him that people do whatever he says they should.
- 29 It is important to him to have the power to make people do what he wants.
- 41 It is important to him to be the one who tells others what to do.

Resources: Wealth and material resources

- 12 It is important to him to have the power that money can bring.
- 20 It is important to him to be wealthy.
- 44 It is important to him to own expensive things that show his wealth.

コメント【SS11】: Being in a position that people will do whatever he says they should do.

コメント【SS12】: That is, to impose his will on others

コメント【SS13】: To be the person in charge in any group

コメント【SS14】: The ability to control things and get one's way through having money. Can be reversed in translation to read: 'Having the power that money can bring is important to him/her'

Face: Maintaining public image

- 9 It is important to him that no one should ever shame him.
- 24 It is important to him to protect his public image.
- 49 It is important to him never to be humiliated.

コメント【SS15】: put him to shame, publicly question his morality or competence

コメント【SS16】: Public image refers to a person's reputation, the way others see us.

コメント【SS17】: made to appear immoral or incompetent

Security: Safety, stability and order*Societal: Security in the wider society*

- 2 It is important to him that his country is secure and stable.
- 35 It is important to him that the state is strong and can defend its citizens.
- 50 It is important to him that his country protect itself against all threats.

コメント【SS18】: The country with which one identifies as a resident or citizen

Personal: Security of self and one's immediate environment

- 13 It is very important to him to avoid disease and protect his health.
- 26 It is important to him to be personally safe and secure.
- 53 It is important to him to avoid anything dangerous.

コメント【SS19】: Be sure to put disease first. If possible. Use words that imply that the person feels threatened—hence 'protect' health, not 'preserve' health

コメント【SS20】: Keep away from all dangers and threats. There should not imply avoiding *acting* dangerously oneself. The person avoids external dangers.

Tradition: Maintaining and preserving cultural, family and/or religious traditions

- 18 It is important to him to maintain traditional values and ways of thinking.
- 33 It is important to him to follow his family's customs or the customs of a religion.
- 40 It is important to him to honor the traditional practices of his culture.

コメント【SS21】: Make sure that this 'or' is clear so the item can apply to a person who values family customs but not religious customs.

コメント【SS22】: To value the practices highly, to hold them in high regard, to respect and revere them. This is about valuing the practices but not necessarily about behaving in any particular way. The person may or may not behave according to these practices.

Conformity: Avoidance of violating informal or formal social expectations*Rules: Compliance with rules, laws and formal obligations*

- 15 It is important to him never to violate rules or regulations.
- 31 It is important to him to follow rules even when no-one is watching.
- 42 It is important to him to obey all the laws.

コメント【SS23】: formal rules regarding how things should be done according to some authority or organization

コメント【SS24】: The items use three different words for what should be avoided. The three words have quite similar meanings. Try to find 3 different words in translating. In each item, use the word which is colloquially most appropriate. All 3 mean to distress or perturb mentally or emotionally and the antonyms calm, sooth, delight, apply to all of them. Annoy is slightly weaker than the others. Upset has more of a connotation of agitating and troubling. Some other synonyms that might help in finding different translations are: bother, exasperate, irk, vex, disquiet, unsettle.

Interpersonal: Avoidance of upsetting or harming others

- 4 It is important to him to avoid upsetting other people.
- 22 It is important to him never to annoy anyone.
- 51 It is important to him never to make other people angry.

Humility: Recognizing one's insignificance in the larger scheme of things

7 It is important to him never to think he deserves more than other people.

38 It is important to him to be humble.

54 It is important to him to be satisfied with what he has and not ask for more.

コメント **[SS25]**: Humble people do not want to think that they deserve more status, prestige, fame, or praise, than other people do, because they do not view themselves as more important or better than others or as more morally worthy.

コメント **[SS26]**: Not desire much either in the sense of goods or the sense of admiration and recognition. If you cannot convey both senses with one word but can with two, use two. If you must choose, the second sense is more central.

Benevolence: Promoting the welfare of one's in-groups

Dependability: Trustworthy and reliable

19 It is important to him that people he knows have full confidence in him.

27 It is important to him to be a dependable and trustworthy friend.

55 It is important to him that all his friends and family can rely on him completely.

Caring: Devotion to the needs of the in-group

11 It is important to him to take care of people he is close to.

25 It is very important to him to help the people dear to him.

47 It is important to him to concern himself with every need of his dear ones.

コメント **[SS27]**: Paying attention to and helping with

Universalism: understanding, appreciation, tolerance, and protection for the welfare of all people and for nature

Concern: Equality, justice and protection for the weak in society

5 It is important to him that the weak and vulnerable in society be protected.

37 It is important to him that every person in the world have equal opportunities in life.

52 It is important to him that everyone be treated justly, even people he doesn't know.

コメント **[SS28]**: The poor, sick, unemployed, discriminated against, etc.

Nature: Preservation of the natural environment

8 It is important to him to care for nature.

21 It is important to him to take part in activities to defend nature.

45 It is important to him to protect the natural environment from destruction or pollution.

コメント **[WU29]**: 'Care for' should imply actively trying to preserve nature, not merely thinking or worrying about environmental issues.

Tolerance: Acceptance and understanding of those who differ from oneself

14 It is important to him to be tolerant toward all kinds of people and groups.

34 It is important to him to listen to and understand people who are different from him.

57 It is important to him to accept people even when he disagrees with them.

コメント **[SS30]**: Willingly interact with, give them equal rights

〈資料3〉PVQ-RR SLQ と日本語版 TLQ との対応表

PVQ-RR SLQ	真鍋／Hommerich による TLQ
Here we briefly describe different people. Please read each description and think about how much that person is or is not like you. Put an X in the box to the right that shows how much the person described is like you.	ここでは、いろいろな人びとについて簡潔に描写しています。それぞれの文を読んで、そこに描かれた人が「自分と似ていると思うか」、それとも「自分とは似ていないと思うか」について考えてみてください。その上で、それぞれの程度を□の中に×印を書き込んでお答えください。
HOW MUCH LIKE YOU IS THIS PERSON?	この人は、どのくらいあなたに似ていますか。
<ul style="list-style-type: none"> — Not like me at all — Not like me — A little like me — Moderately like me — Like me — Very much like me 	<ul style="list-style-type: none"> — まったく似ていない — ほとんど似ていない — あまり似ていない — 少し似ている — かなり似ている — とても似ている
1. It is important to him to form his views independently.	この人にとっては、自分の考えを、自分でまとめあげることが重要である。
2. It is important to him that his country is secure and stable.	この人にとっては、自分の国が安全で、安定していることが重要である。
3. It is important to him to have a good time.	この人にとっては、楽しい時間を過ごすことが重要である。
4. It is important to him to avoid upsetting other people.	この人にとっては、ほかの人の気を動転させないようにすることが重要である。
5. It is important to him that the weak and vulnerable in society be protected.	この人にとっては、社会のなかで、弱くてもろい立場にある人たちが守られることが重要である。
6. It is important to him that people do what he says they should.	この人にとっては、人びとはこうすべきだと、自分が言うことを、人びとがすることが重要である。
7. It is important to him never to think he deserves more than other people.	この人にとっては、自分がほかの人たちよりも、もっとよい扱いを受けるべきだとは決して考えないことが重要である。
8. It is important to him to care for nature.	この人にとっては、自然の世話をすることが重要である。
9. It is important to him that no one should ever shame him.	この人にとっては、誰もが、自分に恥ずかしい思いをさせないことが重要である。
10. It is important to him always to look for different things to do.	この人にとっては、いつも新しく何かすることを探し求めることが重要である。
11. It is important to him to take care of people he is close to.	この人にとっては、親しい人たちの面倒を見ることが重要である。
12. It is important to him to have the power that money can bring.	この人にとっては、お金がもたらすことのできる力を持つことが重要である。
13. It is very important to him to avoid disease and protect his health.	この人にとっては、病気を予防し、健康を守ることが非常に重要である。
14. It is important to him to be tolerant toward all kinds of people and groups.	この人にとっては、あらゆる人びとや集団に対して寛容であることが重要である。
15. It is important to him never to violate rules or regulations.	この人にとっては、ルールや規則には、決して違反しないことが重要である。
16. It is important to him to make his own decisions about his life.	この人にとっては、自分の人生は、自分自身で決めることが重要である。
17. It is important to him to have ambitions in life.	この人にとっては、人生に大きな望みを抱くことが重要である。
18. It is important to him to maintain traditional values and ways of thinking.	この人にとっては、伝統的な価値観や考え方を持ち続けることが重要である。

19. It is important to him that people he knows have full confidence in him.	この人にとっては、知り合いが、自分に全幅の信頼を置くことが重要である。
20. It is important to him to be wealthy.	この人にとっては、自分が裕福であることが重要である。
21. It is important to him to take part in activities to defend nature.	この人にとっては、自然保護の活動に参加することが重要である。
22. It is important to him never to annoy anyone.	この人にとっては、決して人をいらだたせないことが重要である。
23. It is important to him to develop his own opinions.	この人にとっては、自分の意見を作りあげることが重要である。
24. It is important to him to protect his public image.	この人にとっては、世の中の人びとの、自分に対する評判を守ることが重要である。
25. It is very important to him to help the people dear to him.	この人にとっては、自分の大切な人たちの手助けをすることが非常に重要である。
26. It is important to him to be personally safe and secure.	この人にとっては、自分が無事で、安全であることが重要である。
27. It is important to him to be a dependable and trustworthy friend.	この人にとっては、頼りになる、信頼できる友人であることが重要である。
28. It is important to him to take risks that make life exciting.	この人にとっては、人生をわくわくしたものにさせる冒険をすることが重要である。
29. It is important to him to have the power to make people do what he wants.	この人にとっては、自分が望んでいることを、ほかの人にさせる力を持つことが重要である。
30. It is important to him to plan his activities independently.	この人にとっては、自分の活動を、自分で計画することが重要である。
31. It is important to him to follow rules even when no-one is watching.	この人にとっては、たとえ誰も見ていないときでも、規則に従うことが重要である。
32. It is important to him to be very successful.	この人にとっては、万事うまくいっていることが重要である。
33. It is important to him to follow his family's customs or the customs of a religion.	この人にとっては、家族の慣習、あるいは宗教上の慣習に従うことが重要である。
34. It is important to him to listen to and understand people who are different from him.	この人にとっては、自分とは異なる人びとの言うことに耳を傾け、理解することが重要である。
35. It is important to him to have a strong state that can defend its citizens.	この人にとっては、自分の国が、国民を守ることでできる強い国であることが重要である。
36. It is important to him to enjoy life's pleasures.	この人にとっては、人生の喜びを味わうことが重要である。
37. It is important to him that every person in the world has equal opportunities in life.	この人にとっては、世界のすべての人びとが、人生において平等な機会を持つことが重要である。
38. It is important to him to be humble.	この人にとっては、謙虚であることが重要である。
39. It is important to him to figure things out himself.	この人にとっては、ものごとを自分で考えぬくことが重要である。
40. It is important to him to honor the traditional practices of his culture.	この人にとっては、自分の文化の伝統的な慣行を尊重することが重要である。
41. It is important to him to be the one who tells others what to do.	この人にとっては、何をするかを、ほかの人に指示する人であることが重要である。
42. It is important to him to obey all the laws.	この人にとっては、法律をすべて守ることが重要である。
43. It is important to him to have all sorts of new experiences.	この人にとっては、さまざまな新しい経験をすることが重要である。
44. It is important to him to own expensive things that show his wealth.	この人にとっては、自分が裕福であることを示す高価なものを所有することが重要である。
45. It is important to him to protect the natural environment from destruction or pollution.	この人にとっては、自然環境を破壊や汚染から守ることが重要である。

46. It is important to him to take advantage of every opportunity to have fun.	この人にとっては、あらゆる機会を利用して、楽しむことが重要である。
47. It is important to him to concern himself with every need of his dear ones.	この人にとっては、自分の大切な人が必要としているあらゆることに気を配ることが重要である。
48. It is important to him that people recognize what he achieves.	この人にとっては、自分が達成したことを、人びとが認めることが重要である。
49. It is important to him never to be humiliated.	この人にとっては、決して恥をかかされないことが重要である。
50. It is important to him that his country protects itself against all threats.	この人にとっては、自分の国が、あらゆる脅威から国を守ることが重要である。
51. It is important to him never to make other people angry.	この人にとっては、決して人を怒らせないことが重要である。
52. It is important to him that everyone be treated justly, even people he doesn't know.	この人にとっては、たとえ自分の知らない人であっても、すべての人が公正に扱われることが重要である。
53. It is important to him to avoid anything dangerous.	この人にとっては、いかなる危険も回避することが重要である。
54. It is important to him to be satisfied with what he has and not ask for more.	この人にとっては、自分がいま持っているもので満足し、それ以上を求めないことが重要である。
55. It is important to him that all his friends and family can rely on him completely.	この人にとっては、すべての友人や家族が自分を完全に頼ることができることが重要である。
56. It is important to him to be free to choose what he does by himself.	この人にとっては、自分がすることを自分で自由に選ぶことが重要である。
57. It is important to him to accept people even when he disagrees with them.	この人にとっては、たとえ自分と意見の違う人たちがいた場合でも、その人たちを受け入れることが重要である。

Methodological Examination of the Schwartz Values Survey

ABSTRACT

A great deal of research has been conducted on the topic of values, and a vast amount of literature on this subject exists. Schwartz values research is among those studies receiving the most attention within the global academic community. The content is primarily focused on Schwartz's depiction of basic human values in a configuration model referred to as a "circular continuum."

But, how can we reproduce the Schwartz values model in the same way in different countries, such as in Japan and Germany?

In order to inquire into this problem, we started our collaborative and comparative project. The project had its earliest beginnings in January 2014, the members being Professors Wolfgang Jagodzinski, Eldad Davidov, Herman Dülmer (University of Cologne), Associate Professor Carola Hommerich (Hokkaido University) and Professor Kazufumi Manabe (Aoyama Gakuin University).

This research note attempts to report the entire process of our reproduction of the Schwartz values survey. In the first stage of this process, we focus on translating the Schwartz values items into Japanese. In this process, we were confronted with some difficult problems. After discussing such methodological problems, we propose a new idea of translation-back-translation, which is, so to speak, a "de-centering method."

Key Words: values model, reproduce, PVQ-RR, SLQ/TLQ, translation and back-translation, de-centering